

# 東日本大震災から4年半後の現実：備忘録ないしは切り抜き帳(その21)

[2015年8月31日(月)]

○昨日の国会周辺デモがどのように新聞に報道されているか、数紙を比べてみた。東京新聞は右のように1面全部を使っており、他のページでも国会周辺デモへの参加者の時系列に沿った変化や参加者の分布状態などの詳細を伝えていた。朝日新聞の1面トップは『住宅耐震82% 鈍い伸び』であった。もちろん、これも重要な記事で、防災の日を翌日に控えた“災害大国 あすへの備え”特集の一環として掲載されたもの



東京新聞第1面に掲載された『国会議事堂正門前の道路を埋め尽くしたデモ参加者』。この位置から見ると機動隊のバスが国会議事堂を守るためのバリケードの役割を果たしていたことが良く解かる。

ようであった。国会周辺デモの記事は1面左側に2番手として掲載され、第2面と社会面にも多くの紙面が割かれており、内容も非常に充実したものであった。また、朝日デジタル版に掲載されていた“国会前デモ、写真で振り返る”の動画も非常に良くできていた。それに比べると、読売新聞のトップ記事は『群大術後死 新たに12例』であって、国会周辺デモの記事は第2社会面の一部に小さく、しかも新宿区内で開催された参加者約500人の安保賛成派のデモと一緒に掲載されているのみであった。テレビ報道においても国会周辺デモ関連のニュースは概して控えめの扱いになっていたようであるが、特にNHKでは殆ど取り上げられていなかったように思われる。それぞれの立場で主義主張は同じではないので、それは一向に構わないのであるが、東京新聞では、国会正門前の歩道から車道へと人々が溢れだした状況を“決壊したぞー”と云う人々の生の声で報じており、また、歴史社会学者の解説記事として“国会前という空間が抗議の場として定着し、不当を感じることに声を上げる政治文化が浸透したのはよい変化”であること、“メディアと政党がいくらか社会の変化に追いついてきており、まだ変化を感知できていないメディアと政党は、自分たちが「裸の王様」の状態にあることを知るべき”であること等の厳しいコメントが際立っていた。

[2015年9月3日(木)]

○9月1日の防災の日に、東京新聞の社説には珍しく右の写真が掲載されていた。写真は1959年(昭和34年)伊勢湾台風の翌月の中部日本新聞(現在の中日新聞)日曜版だそうで、引用されている『木曾川流域濃尾平野水害地形分類図』は伊勢湾台風の3年前に当時の総理府が作成していたそうである。『地図は悪夢を知っていた』とのタイトルにあるように、伊勢湾台風の被害分布は3年前の被害予測とピッタリ一致していたそうで、『仏(科学)作って魂(政治)入れず』とは“言い得て妙”ではないだろうか。



○新聞紙面には、その後も8月30日の安保法案に反対する国会周辺デモに関連する記事が多く見られる。東京新聞(9/1)の“こちら特報部”にはこの問題がよく整理されていて、「安全保障関連法案のデモの参加者が、国会前の道路を埋め尽くし、全国300カ所近くで集会が開かれた。反対の声は強まっている。国会審議で、安倍晋三首相は『いまだ国民に十分なご理解をいただいていない面がある』とたびたび発言しているが『法案を成立させてはいけない』という理解が進んだ結果ではないのか。」との書き出しに続いて、いくつかの主要な点が指摘されている。今回のデモは「従来からある労組などの動員型とは違って、市民が自発的に『安保法案は危険』と集まった」老若男女の集合体であり、「国会前デモだけでなく各地で同時に抗議行動があって、全国的には100万人規模と言え、日本では1960年安保以来の人数」で、国内だけでなく海外のメディアにも大いに注目されている点が1つ。冒頭にも引用させて頂いたように「安倍首相は国会で『国民の理解は進んでいない』と再三答弁してきたが、問題を理解する人が増えてきたからこそ、デモの参加者が膨れ上がったのではないのか」「安倍首相が説明すればするほど、国民は安保法案の危険性を感じ、それが反対運動につながっている」との指摘にも大いに首肯できる。さらに重要な指摘は『多数決主義と民主主義は違う』という点であり、もう1つ、東京新聞(9/1)の“デスクメモ”にあるように「ひとたび集団的自衛権を行使してしまえば、約70年間、戦争をしていない『平和国家』という看板は失われる」ことの損失は余りにも大きいのではなからうか。最後に、東京新聞に掲載されている“本音のコラム”を2つほどコピペさせて頂きたい。いずれも国会周辺デモに関するものであるが、鎌田氏の文章で、久しく聞かなかった“主催者発表〇〇人、警察発表△△人”と云う懐かしいフレーズを思い出してしまった。斎藤氏は、小生がデモの翌日に試みようとした新聞紙面の比較をさらに徹底してやっておられ、さすがプロは違うと思知らされた。

**デスクメモ**  
 世界は平和な地域ばかりではない。平和を築くための国際貢献は必要だろう。だが、軍力ですべて解決できない。集団的自衛権を行使してしまえば、約七十年間、戦争をしていない「平和国家」という看板は失われる。日本ならではの平和貢献こそ、考えていただきたい。(文)

**本音のコラム**

「東京に空がない」といったのは高村智慧だが、それに倣って、「東京には広場がない」と書いた。都心にある明治公園は、問題の「新国立競技場」建設で使えない。日比谷公園の野外音楽堂は四千人以上。数万人がはいれるのは代々木公園だが、たいがいイベントでさがついで、集会に借りられるのは年に数回しかない。三十日の安保法案反対集会は、警察関係者によると二万人程度だという。最近、意識的に小さな数字をマスコミは使わなかったが、一部では発表に新聞はあまり責任を負わない。それが客観

**広場と民主主義**

鎌田 慧

報道(冤罪被害をよ)のあしき伝説か。広場がなく一カ所に集まらない。三十日は過剰規制が入波で決壊して、議事堂正面大通りの大群が可視化できた。それ以外にも国会の周りの歩道はもうろん、最高裁から国土交通省、外務省、財務省の霞が関一帯、日比谷公園前までひとであふれた。警察がウソを言っただけじゃない。広場がないのは、政府に抗議する人たちが分散して隠す。一種の陰謀といえる。大きな広場があれば、おのずかひろびろびろと集まりやすくなる。一九五二年ごろまで、皇居前広場はひろかれた場所だった。それが禁止されていまに至る。公安条例で、集会、デモは厳しく制限された。それで民主主義国家といえるのか。(ルポライター)

**本音のコラム**

安保法案に反対する八月二十日の全国一斉デモを、翌二十一日の東京新聞は紙面をたっぷり割いて伝えた。同日の全国紙はどうかだったろう。朝日新聞は一面のほかに二面、社会面でもこれを報道、毎日新聞も一面で報道、毎日新聞には抗議行動の広がりを見せる全国地図を掲載した。苦笑したのは読売新聞だ。社会面に載った小さな記事の見出しは「安保法案「反対」「賛成」デモ」。二十九日に新報で行われた賛成デモ(主催者発表で五百人)、と国会前の反対デモ(同十二万人)を同様に扱い、さも意見が拮抗している風を装う。写真も一枚。

**新聞の立ち位置**

斎藤 美奈子

が、(こ)まではまだマシ。笑いが引きつるのは産経新聞だ。社会面の記事の見出しは「周辺、雨中驟然」。国会正門前には参加者が詰めかけた。へ警察官が制止する中、参加者が柵を乗り越えて車道にあふれ、車道がふさがれる状態が夕方まで続いた」などの文面には「デモ」騒擾」とみならず姿勢がありあり。公安関係者に取材し、SEALDsについては「洗練された、グリー」なイメージで存在感を示しているが、実態は不明な部分もある。読売が御用新聞風なら悪意に満ちた産経の報道は、もはや市民の敵レベル、特高警察風である。市民運動に対する認識も五十年前、ジャナリズムの看板はもう下ろしたろか。(文芸評論家)

[2015年9月8日(火)]

○9月3日のTVと翌日の新聞報道によれば、自衛隊の河野幕僚長は昨年12月の訪米時に、安保関連法案が今夏までに成立するとの見通しを米軍首脳に伝えていたことが、9月2日の参院特別委員会で共産党議員によって暴露されている。国会で審議もされていない同法案を今夏までに成立させると、安倍首相が4月の米国連邦議会での演説で公言したことが批判されているが、それよりもさらに数か月も前のことである。自衛隊内部では同法案の成立を見越した具体的なシナリオ作りも行われているとの話もあって、今国会での審議は形式的なものに過ぎないのではないかと不安に駆られる。政府も自衛隊も、国民を無視して米国の言いなりに動いているようにしか見えないのであるが、本当にそんなことで良いのだろうか。本日のTV報道によれば野田聖子氏は総裁選への出馬を断念したようであるが、安倍首相に何も意見を言えない自民党議員、野田氏支援者の切り崩しに加担した自民党議員、また切り崩しに屈してしまった自民党議員とはいったい何なのか。自民党内部でもっと考えて欲しいのは、安倍首相が説明すればするほど国民が安保法案の危険性を感じ、それが反対運動に繋がっているのは何故かと云うこと、多数決主義と民主主義は違うと云うこと、積極的平和主義の本当の意味は何かと云うこと、TPPのことや原発再稼働のこと、普天間飛行場の辺野古移設のこと、マイナンバー制度のことなど、他にも考えて戴きたいことは沢山あるが、それらの議論に際して自民党国会議員のすべてが全く同一意見というのであれば、これほど気持ちの悪いことはない。

[2015年9月9日(水)]

○今朝の朝日新聞“天声人語”「『雑食』忘れた自民党」は素晴らしかった。昨日、考えていることをうまく表現できなかったことが、まるでお手本のようにスマートに表現されていることに心から敬意を表して、以下に書き留めさせて頂きたい。「好き嫌いはいけません——。子どものしつけの基本である。多様な栄養素を満遍なく摂取しないと、からだに障る。脳も同じらしい。色々なことをバランスよく経験すると、若々しさが保たれるという。脳科学者の茂木健一郎さんは、脳は『雑食』を好む、と表現している▼茂木さんは右利きだが、なるべく左手を使うそうだ。左手で箸を持ったりすると、左右の脳が釣り合いよく使われることになる。脳を疲れさせないためには大切らしい。単調な使い方だと脳は弱くなってしまうという。偏食はいけない▼何でも食べるというと、昔の自民党を思い出す。右派からリベラルまで、官僚出身から党人派まで、幅広い人材を抱え、土建、農政、厚生と族議員の品ぞろえも豊富だった。『国民政党』と言われたゆえんだ▼以前、自民党幹部が民主党を『雑居政党』と評したので、筆者は自民党は『雑食政党』ですねと返した。宿敵社会党をものみ込んで連立したのだから、と。負の側面も含め、胃の丈夫な集団だった▼よく肥えた健啖(けんたん)家の面影は、今の自民党にはない。右の方に傾いて、やせぎすに見える。きのう、『この道しかない』の安倍総裁が再選された。『この道も、あの道もある』と掲げた野田聖子氏は、わが子の偏食を叱るかに見えたが、及ばなかった▼心配する義理はないが、この道を行きすぎて栄養不足にならないか。茂木さんよろしく、時には左手も使ってバランスを取って、などと言ったら怒られるに決まっているが。」

[2015年9月17日(木)]

○常総市における鬼怒川水害から今日で1週間とのこと、被害の大きさが膨大な廃棄物(被災ごみ)の量で計られているようで何とも痛ましいことである。たまたま翌11日には東北新幹線で仙台に向かったが、車窓から見る黄金色の田園風景は見事なものであった。恐らくは水害で被災した地域にも同様の風景が広がっていたはずで、それを思うと言葉もないほどである。ところで、今回の常総市の水害について、気になる点を指摘しておきたい。実は、水海道市と石下町が平成の大合併によって10年前に誕生したのが常総市であった。そして、市役所はかつての水海道市が存在していた市の南端に位置しており、鬼怒川堤防の決壊は市の北部に位置する旧石下町内で発生している。東日本大震災の時にも感じたことであるが、このような行政上の都合が避難勧告・指示の遅れに影響を与えたことはないだろうか。もう一つ疑問に感じているのは、このような水害の常襲地帯には“水海道”と云う地名を残しておく必要があるのではないかと云う点である。鬼怒川と小貝川に挟まれた今回の被災地域にとって、酷なようではあるが水害は云わば“宿命”であり、そのことを忘れないためにも地名の改変は好ましくないのではなかろうか。[折々のトピックス(9/10)にも関連資料があります]

○本日は朝からテレビにくぎ付けで夕方まで過ごしてしまった。もちろん安保関連法案を巡る参院特別委員会の推移を見守るためである。特に午後に入って、鴻池委員長に対する不信任案への賛成意見を述べた福山哲郎(民主)・大塚耕平(民主)・清水貴之(維新)・井上哲士(共産)・福島瑞穂(社民)・山本太郎(生活)など野党各委員の弁論は圧巻であった。各委員ともに鴻池委員長の委員会運営に見せた才覚を評価しながらも、昨日あたりから突然、横浜での公聴会の直後に2時間だけの締めくり質疑を行い採決に移るとの意向を表明したことを批判し善戦しているように見受けられたが、採決では数の力であっさり否決されてしまった。鴻池委員長が着席するや否や委員長席は与野党議員でもみくちやの状態になり、うやむやのうちに質疑打ち切り動議と安保法案の可決が宣告された。立憲民主主義など全く無視した野蛮なやり口には本当にびっくりで、これから参政権を得ようとしている若者や子供たちには見せたくない光景であった。シールズの奥田氏が15日の中央公聴会での意見陳述で述べていた次の一節を引用させて頂きたい。「この法案が強行に採決されるようなことがあれば、全国各地でこれまで以上に声上がるだろう。連日国会前は人であふれかえるだろう。次の選挙にももちろん影響を与えるだろう。当然、この法案に関する野党の方々の態度も見ている。本当にできることはすべてやったのだろうか。私たちは決して今の政治家の方の発言や態度を忘れない。三連休を挟めば忘れるだなんて国民をバカにしないでください。むしろそこからまた始まっていく。新しい時代はもう始まっている。もう止まらない。すでに私たちの日常の一部になっているのです」まるで2日後の愚行を見通していたようではないか。

2015年9月17日 文責：瀬尾和大